

(西暦) 2022年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

中高生におけるがんの理解とイメージ
～親のがん治療が始まる年代に着目して～

学位の種類: 修士 (看護学)

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 21894703

氏名: 栄 裕海

(指導教員名: 福井 里美)

【背景】がんは1981年から国内の死因第一位であったが、がん対策基本法の制定(2007年)を契機に様々な制度等が策定され、第2次がん対策推進基本計画(2012年)や、第3次がん対策基本計画(2018年)の一つとして、学校でのがん教育が開始されたばかりである。一方、がんと診断された親を持つ未成年の子どもの平均年齢は11.2歳であり、子どもたちのがんの診断をどのように伝えるのが課題である。しかし、対象年代のがんの認識を示すデータは僅かである。

【目的】中高校生ががんについてどのくらい理解し、またどのようなイメージを持っているのかを明らかにすることである。

【方法】2022年3月～7月に、関東圏内の中学1,2年生と高校1,2年生を対象とし、質問紙とWebを併用した調査を行った。背景では、学年、性別、がん教育、身近ながん患者の有無、がんに触れる機会等の回答を求めた。がんの理解については、3択形式で26項目の質問文を作成した。質問文には誤文も含む形で作成し、質問紙回収後に解説を配布することとした。がんのイメージでは、「怖いvs優しい」「苦しいvs楽な」等の12項目の形容詞対について、SD法(7件法)を用いて尋ねた。本研究は東京都立大学荒川キャンパス研究倫理審査委員会の承認を得て実施したものである(承認番号:21097)。

【結果】中学生289名、高校生553名、合計842名(質問紙552名、Web290名、回収率31.4%)より回答を得た。内訳は、男378名(44.9%)、女447名(53.1%)、がん教育を受けた521名(61.9%)、受けていない198名(23.5%)であった。がんの理解は、ストレスの予防やがん検診等、がんの予防に関しては正答率が高く、具体的な治療方法、緩和ケアの開始時期に関しては正答率が低かった。中高生全体で、がんのイメージが強かったのは、順に怖い、苦しい、重いであった。年齢で比較すると高校生より中学生の方が高齢となる、障害が残るイメージを強く持っていた。また、がん教育を含めたがんに触れる機会がない生徒の方が、より負のイメージが強いことが明らかとなった。

【考察】中高生は、がん教育によってがんの予防について学習しているため具体的に理解しているが、がん治療や緩和ケア等のがん罹患後に関する内容は抽象的な理解であり、具体例や考える機会の提供が求められる。また、がん教育を含むがんに触れる機会が少ない生徒の方が負のイメージを強く持っていたため、学校に限らずがんに触れる機会を持つことが大切である。加えて、単にがんに触れる機会を増やすだけでなく、ピアサポートで積極的に活動している方の前向きな姿や情報提供等が、親が闘病している子どもにとっても重要と考えられた。